

第8回 農村女性についての研究会

東北大学大学院
情報科学研究科 会議室
1996年1月27日(土)

参加者(五十音順、敬称略)

安孫子麟、阿部和江、伊藤純、加藤眞義、小林一穂、佐久間政広、永井彰、仲山彩子、細谷昂、水上英徳、三須田善暢、柳谷慶子

報告「農業生産組織と女性---宮城県角田市古豊室地区の事例---」

東北学院大学 佐久間政広

佐久間報告は、「地域複合」の模範的事例として1986(昭和61)年度「朝日農業賞」を授賞した「古豊室(コトヨム)農業生産組合」のその後の経過を、とくに各個別農家の就労構造の変化に焦点をあてて追跡することにより、現時点での地域複合および農家の家族関係のはらむ問題状況を明らかにすることをめざしたものである。長年にわたる調査によってえられた詳細なデータにもとづく報告であったため、細かな点にまで多岐にわたる質疑応答がかわされたが、以下骨子を述べるにとどめたい。

対象地区においては、1972(昭和47)年、9戸による機械の共同利用・共同作業をおこなう「古豊室水稻協業組合」が結成され、そのことによって生ずる女性の余剰労働力を活用した梅干し生産が1975年より開始された。現在、年120 t.の梅干しを「角田市農協」をとおして、「みやぎ生協」へと出荷するにいたっている。

この「梅干し部門」への就労については、労賃は、地区内の農外パート労働の水準にあわせて設定されている。加えて作業場は地区内にあり、また就労者が互いに顔見知りということもあって、事情におうじた就労時間の調整がしやすいという特徴をもつ。しかし、「梅干し部門」に現時点まで就労し続けている女性は、50歳代3名であり、他の女性は、下の世代の出産を機に孫の世話が必要となった時点で、梅干し部門への就労をやめていき、現在は不足分の労力については他地区よりのパートで補充している。逆に、発足当時から就労している女性についてみると、理由は様々ながら孫の世話の必要がないという共通した特徴がみられる。より下の世代の女性は、1ケースの専業主婦をのそくと皆、結婚以前よりの農外就労を継続しており、当該部門への就労はみられない。開始当時20代後半～30代であった女性たちにとって適合的であり、創意工夫を発揮しえた就労の場が、その後の地区女性たちにとってはかならずしも同等の魅力をもっていない点に、当該部門の世代交代が困難となっている理由があるのである。

かつて、農家経済にとって、という観点から農外ではなく農業部門で労働力を燃焼しうる就労の場を確保しているという点が注目・評価された組合であったが、農外就労の経験をもつ女性個人にとって、労働の場としていかなる魅力をもちうるのかという観点から、あらためてその意義が問われている転機にさしかかっているように思われる。

(東北大学助手 加藤眞義)